2023年1月12日

立川市長　清水庄平 様

美術評論家連盟
会長　四方幸子

岡﨑乾二郎氏《Mount Ida ―イーデーの山（少年パリスはまだ羊飼いをしている）》
保存に関する要望書

ファーレ立川アートにおける岡﨑乾二郎氏の作品《Mount Ida ―イーデーの山（少年パリスはまだ羊飼いをしている）》（1994 年）の、立川高島屋 S.C.によるリニューアル工事に伴う撤去検討の報を受け、本連盟はこの作品の存続について憂慮しています。そのかけがえのない文化的価値の再確認を求めるとともに、同作品の保存を要望いたします。

36カ国92人の作家による109点の作品からなるファーレ立川は、日本におけるパブリックアートプロジェクトの代表例であり、都市計画学会計画設計賞、日本建築美術工芸協会特別賞、都市景観大賞を受賞しています。その作品群は、今では集めることがほぼ不可能な、高い価値を持つ作品ばかりです。同等の価値を持つ大型作品をこの規模で所蔵している美術館は、日本国内に存在しないだけでなく、国外においても数少なく、海外からも高く評価されています。ファーレ立川を目的に海外から訪れる人も少なくありません。

ファーレ立川は、日本の都市文化の類例のない成功例として、すでに歴史に刻まれている文化遺産です。なによりも完成後、四半世紀の時間の経過とともに、その存在に触れた、美術家、文学者、建築家などクリエイターたちに刺激を与え、その空間のなかで、多くの人々が暮らし育ってきた事実が、ファーレ立川が代替不可能な文化的環境となっていることを明瞭に示しています。ここで育った人々の中には、この環境が失われることは自らの精神的基盤が損なわれることに等しいと感じる人も少なくないと考えます。

ファーレ立川の最大の特徴は、美術作品を、単に設置しただけではなく、都市計画の骨格となる基盤（インフラ）として位置づけたことにあります。作品が、街路や照明、空調、下水道、交通標識と同等に、都市の文化環境を形成するインフラとして設置されていることが、ファーレ立川の画期的な歴史的偉業であり、パブリックアートの革新に大きな貢献をもたらしました。ファーレ立川が 1980 年代以降の都市文化を代表する文化遺産であると、私たちが評価する所以です。

以上で述べたような、都市文化としてのファーレ立川を鑑みるに、岡﨑乾二郎氏の作品《Mount Ida ―イーデーの山（少年パリスはまだ羊飼いをしている）》（1994 年）は、ファーレ立川の核心となる作品であることがわかります。ファーレ立川の重要なコンセプトは岡﨑氏の作品にこそ最もよく体現されています。

岡﨑氏は、日本を代表する造形作家・批評家であり、現在は東京大学大学院客員教授を務めています。その作品は、東京国立近代美術館、国立国際美術館、東京都現代美術館、兵庫県立美術館、富山県美術館など全国の美術館に所蔵されており、2019年に芸術選奨文部科学大臣賞、2022年に毎日出版文化賞を受賞しています。

岡﨑氏の作品は、新しい都市軸となるモノレールの動線を予測的に取り入れ、歩行者を誘導するように仕掛けられた形状（階段が設けられているのはここを小さな公園として歩行者を招き入れる誘いともなっていました）を持っています。換気の機能を果たしながら、植物を通して空気を浄化する仕組みがあり、金網には人為的

な侵入から自然を守る含意もあります。また、ギリシア神話に登場する、パリスの審判が行われる前のイーデー山にちなんだタイトルも、この作品の豊かな意味を示しています。ビルの壁面を背景とした山なみのような形状はギリシャ神殿の三角破風の彫刻の形式を踏襲しており、ファーレ立川の新しい表通りに面したファサードになることを当初から予測してデザインされています。彫刻が都市計画全体と連携し、都市に張り巡らせたネットワークを取り込みながら、それらを統合する役割を果たすという、今までになかった都市彫刻の形式を、この作品ほど体現しているものはありません。本作は、都市に存在する岡﨑氏の最大の彫刻作品で、最も入念に組み上げられた、美術史的に見てもかけがえのない名作です。岡﨑氏の作品の解体や撤去は、ファーレ立川全体の最も重要なコンセプトの核心を損なうことに直結します。

四半世紀の時間を経て形成された文化遺産を破壊することは、将来必ず悔いを残すことになります。それと同じ時間は、取り戻すことはできないからです。文化遺産は、長い時間をかけて人々の心の中に精神的遺産として根付いて成長します。破壊は、海外からの訪問者を含めて、その遺産を大切にしてきた人々の心に深い傷を残します。

立川市は、第4次文化振興計画において、ファーレ立川の109の作品群を「まち全体が美術館」構想の中核と位置づけています。そこで「これらの作品は世界的にも非常に価値のある貴重なアート作品群であり、今後も市民や愛好者とともに、素晴らしさを広く発信して守り伝えていかなければなりません」と宣言されているように、「文化とやさしさのあるまちづくり」の推進を図り、文化芸術の振興に取り組んでいる立川市だからこそ、作品を未来につないでいく方法を示していただけるのではないかと考えています。

今回の事案を機会に、ファーレ立川が重要な文化遺産であり、そこに点在する作品のひとつひとつが優れた観光資源であることがあらためて認知されることを願いつつ、同作品の保存を求めます。

2023年1月12日

株式会社高島屋
代表取締役社長 村田善郎 様

美術評論家連盟
会長　四方幸子

岡﨑乾二郎氏《Mount Ida ―イーデーの山（少年パリスはまだ羊飼いをしている）》
保存に関する要望書

ファーレ立川アートにおける岡﨑乾二郎氏の作品《Mount Ida ―イーデーの山（少年パリスはまだ羊飼いをしている)》（1994 年）の、立川高島屋 S.C.によるリニューアル工事に伴う撤去検討の報を受け、本連盟はこの作品の存続について憂慮しています。そのかけがえのない文化的価値の再確認を求めるとともに、同作品の保存を要望いたします。

36カ国92人の作家による109点の作品からなるファーレ立川は、日本におけるパブリックアートプロジェクトの代表例であり、都市計画学会計画設計賞、日本建築美術工芸協会特別賞、都市景観大賞を受賞しています。その作品群は、今では集めることがほぼ不可能な、高い価値を持つ作品ばかりです。同等の価値を持つ大型作品をこの規模で所蔵している美術館は、日本国内に存在しないだけでなく、国外においても数少なく、海外からも高く評価されています。ファーレ立川を目的に海外から訪れる人も少なくありません。

ファーレ立川は、日本の都市文化の類例のない成功例として、すでに歴史に刻まれている文化遺産です。なによりも完成後、四半世紀の時間の経過とともに、その存在に触れた、美術家、文学者、建築家などクリエイターたちに刺激を与え、その空間のなかで、多くの人々が暮らし育ってきた事実が、ファーレ立川が代替不可能な文化的環境となっていることを明瞭に示しています。ここで育った人々の中には、この環境が失われることは自らの精神的基盤が損なわれることに等しいと感じる人も少なくないと考えます。

ファーレ立川の最大の特徴は、美術作品を、単に設置しただけではなく、都市計画の骨格となる基盤（インフラ）として位置づけたことにあります。作品が、街路や照明、空調、下水道、交通標識と同等に、都市の文化環境を形成するインフラとして設置されていることが、ファーレ立川の画期的な歴史的偉業であり、パブリックアートの革新に大きな貢献をもたらしました。ファーレ立川が 1980 年代以降の都市文化を代表する文化遺産であると、私たちが評価する所以です。

以上で述べたような、都市文化としてのファーレ立川を鑑みるに、岡﨑氏の作品は、ファーレ立川の核心となる作品であることがわかります。ファーレ立川の重要なコンセプトは岡﨑氏の作品にこそ最もよく体現されています。

岡﨑氏は、日本を代表する造形作家・批評家であり、現在は東京大学大学院客員教授を務めています。その作品は、東京国立近代美術館、国立国際美術館、東京都現代美術館、兵庫県立美術館、富山県美術館など全国の美術館に所蔵されており、2019年に芸術選奨文部科学大臣賞、2022年に毎日出版文化賞を受賞しています。

岡﨑氏の作品は、新しい都市軸となるモノレールの動線を予測的に取り入れ、歩行者を誘導するように仕掛けられた形状（階段が設けられているのはここを小さな公園として歩行者を招き入れる誘いともなっていました）を持っています。換気の機能を果たしながら、植物を通して空気を浄化する仕組みがあり、金網には人為的

な侵入から自然を守る含意もあります。また、ギリシア神話に登場する、パリスの審判が行われる前のイーデー山にちなんだタイトルも、この作品の豊かな意味を示しています。ビルの壁面を背景とした山なみのような形状はギリシャ神殿の三角破風の彫刻の形式を踏襲しており、ファーレ立川の新しい表通りに面したファサードになることを当初から予測してデザインされています。彫刻が都市計画全体と連携し、都市に張り巡らせたネットワークを取り込みながら、それらを統合する役割を果たすという、今までになかった都市彫刻の形式を、この作品ほど体現しているものはありません。本作は、都市に存在する岡﨑氏の最大の彫刻作品で、最も入念に組み上げられた、美術史的に見てもかけがえのない名作です。岡﨑氏の作品の解体や撤去は、ファーレ立川全体の最も重要なコンセプトの核心を損なうことに直結します。

四半世紀の時間を経て形成された文化遺産を破壊することは、将来必ず悔いを残すことになります。それと同じ時間は、取り戻すことはできないからです。文化遺産は、長い時間をかけて人々の心の中に精神的遺産として根付いて成長します。破壊は、海外からの訪問者を含めて、その遺産を大切にしてきた人々の心に深い傷を残します。

御社は、早くも1909年に現代画家の展覧会を開催し、1911年には美術部を創設するなど、人々の暮らしに美術をもたらしてきました。1990年には公益信託タカシマヤ文化基金を設立し、作家や美術関連団体などへの助成を行っています。そうした伝統をもち、現在も美術の振興に取り組んでいる御社だからこそ、作品を未来につないでいく方法を示していただけるのではないかと考えています。

今回の事案を機会に、ファーレ立川が重要な文化遺産であり、そこに点在する作品のひとつひとつが優れた観光資源であることがあらためて認知されることを願いつつ、同作品の保存を求めます。